

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年6月3日現在

機関番号：13801

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2010～2012

課題番号：22720032

研究課題名（和文） 近代政治思想における未開イメージの形成と変容

研究課題名（英文） The French Enlightenment and the idea of the savage in the eighteenth century

研究代表者

井柳 美紀（IYANAGI MIKI）

静岡大学・人文社会科学部・准教授

研究者番号：50420055

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、18世紀後半のフランス啓蒙思想における文明と未開をめぐる哲学的・政治学的言説の検討を通して、啓蒙の思想家たちが、文明社会の外部や周縁世界をどう描いたのかについて、また人間本性と人間の多様性、人間の普遍性と多様性をどう捉えたのかについて考察するものである。

研究成果の概要（英文）：The aim of this study is to explore how the French Enlightenment thinkers describe non-Western, “uncivilized” people, and how they understand human nature and diversity, by surveying their philosophical and political arguments about the relationship between the civilized man and the savage in the late eighteenth century.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	300,000	90,000	390,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
2012年度	300,000	90,000	390,000
年度			
年度			
総計	1,100,000	330,000	1,430,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・思想史

キーワード：政治思想史、社会思想史、近代フランス啓蒙思想

1. 研究開始当初の背景

近代西洋の啓蒙思想は、現代における人権意識、宗教的寛容、自由の観念などの思想的源泉の一つとしてとりわけ重要な位置を占めるものとみなされる。しかし、「啓蒙の世紀」は、「文明社会（société civilisée, civilized society）」が一つのキーワードとなり、新たに「文明化（civilisation, civilization）」という語彙も登場した時代であり、また理性主義、合理主義、人間中心主義などの思想が台頭した時代でもあった。そのような中で、啓蒙の

いわゆるヒューマニズムは、文明に対する未開、理性的なものに対する非理性的なもの、中心に対する周縁をも射程に入れたものであり得たのか。本研究は、多様性と共生、社会的排除と包摂などの現代的問題意識を共有しつつ、政治思想史的アプローチから、本課題について考察する。

2. 研究の目的

本研究は、（1）第一に、フランス啓蒙思

思想家、特にルソー、ディドロ、ヴォルテールらにおける、未開イメージをめぐる叙述を出発点として、ヨーロッパにおける中心と周縁、文明と未開、ヨーロッパと非ヨーロッパをめぐる思想史の系譜を辿り、ヨーロッパ思想史が知の周縁としてのマイノリティといかに向き合ったのかを明らかにしていく。本研究は、同時に従来の通説的な啓蒙像に対して、啓蒙思想の多様性と複雑さを提示しようとするものでもある。また、(2) 第二に、西洋政治思想史において、特に近代の道徳哲学をめぐる諸議論を手がかりとして、遠くの他者、異質な他者への共感や想像力など、現代の経済秩序が前提とする近代の合理主義的・功利主義的人間観が立脚する利己心とは区別される、利他的感情が公共意識の基盤として果たす役割について検討する。

3. 研究の方法

第一に、フランス啓蒙思想を対象として、当時の文明社会論における未開概念とその政治思想的意義を分析し、第二に、近代を中心に、他者への共感能力などの利他的感情をめぐる政治思想について概念史に力点をおき検討した。

4. 研究成果

本研究の成果は二つに大別される。(1) 前半は、18世紀フランス啓蒙思想家、特にルソー、ディドロ、ヴォルテールらを研究対象として、文明社会におけるマイノリティ認識とその思想的背景を考察するものであり、(2) 後半は、他者への共感能力など利他的感情を基礎とした政治思想の系譜を、近代フランス政治思想を中心としつつ、政治思想全体への見取り図を提示しつつ考察したものである。具体的には、以下の通りである。

(1) フランス啓蒙思想の文明社会論

①フランス啓蒙思想における文明と未開

現代ヨーロッパの重要な思想的基盤である18世紀フランス啓蒙思想を対象として、文明化(civilisation, civilization)が広がる時代における、文明と周縁との関係性についての思想的位置づけについて、ヨーロッパと非ヨーロッパ、文明社会と未開地域、理性的なものや非理性的なもの、などの対立軸を念頭におきつつ検討していった。まずは、地理的拡大を遂げる近代において量的・質的多様性を広げていく旅行記などを狩猟しつつ、モンテーニュやラオンタンらに代表される議論を分析した。特に、未開を称賛しヨーロッパ文明社会を批判し、非ヨーロッパ社会を野蛮とする通説を転倒させた、いわゆる「高貴

な未開人」(bon sauvage, noble savage)をめぐる、当時流布した言説に着目し、その相対主義的視点や自己中心主義への批判の視点を析出しつつ、同時にここには対等な他者への視点に欠く点がある点を分析していった。その上で、これらの思想を受けて登場するフランス啓蒙の思想家たち、特にヴォルテール、ルソー、ディドロらが、未開社会をどう論じたか、3者の比較検討を行った(〔論文〕③として公表)。第一に、ヴォルテールについては、『習俗試論』における「未開人」「さまざまな人種」「原初の人々の宗教」などを対象として、彼の未開論が一方では文明人と未開人との差異や相違を強調した点、それを歴史の発展段階の中に位置づけた点、他方で人類の普遍性についての主張を行っている点—これらの主張からは未開人に理性の開化を促す「理性の専制」のテーゼにつながる危うさがある点—を分析していった。また、ルソーについては『人間不平等論起源論』を中心に、自然状態における抽象的な自然人(l'homme naturel, l'homme de la nature, l'homme Sauvage)についての記述の他、インディアンやニグロなどの具体的な未開人(Les Sauvages)への記述を分析し、両者の記載の相違を検討しながら、人間の普遍性と多様性をどう論じたのか、特に未開人の多様性や独自の文化的営みへの視点における問題点について検討した。また、ディドロについては特に彼の後期の作品『旅行記補遺』や『両インド史』などのうちに、自然と文明の二項対立ではない文明観、さらには遠くの他者への共感や想像力を前提としつつ社会的紐帯を考える政治的思考が示されている点を示し、ヨーロッパ中心主義的文明観・政治観とは異なる独自性をも備えていた点を明らかにしていった。

②ディドロの政治思想と多様性

また、「啓蒙の世紀」において知の周縁にも目を向けた思想家としてのディドロに着目し、その思想の全体像と変遷とを自然観・美学観・政治観の観点から扱った。フランス啓蒙思想家については、合理主義、客観主義、普遍主義などの思想を形成した文脈で取り上げられることが多いが、子供や障害者など非理性的なものの価値を評価したなど、ディドロの思想は独創的なものがあり、特に彼の思想的変遷は従来の通説的啓蒙像の再考とその多様性を考える上で注目に値する。政治思想については、体系的な著作は残していないが、近年新たに政治思想の変遷と後期政治思想への注目が集まっている。本研究では、彼の思想の体系を、科学や美学との関係からも明らかにしていった。自然観についていえば、次第に化学や生物学などの新たな知識を獲得していく中で、静的な自然観から動的で

流動的な自然観を形成していくこと、その過程で環境決定論から離れ、人間の自由意思について新たな立場を形成していった点について検討していった。また、美学においては、演劇や絵画論などを検討し、古典主義の伝統に見られる完全な「自然の模倣」としての美という立場から変化を遂げ、ロマン主義をも彷彿とさせるある種の想像力や創造に関わる美の問題を論じている点について明らかにしていった。その上で、政治論の変化について、初期の作品である『百科全書』時代の政治思想における「自然法」や「政治的権威」などに見られる正義の普遍性に依拠する見方、その帰結としての政治観、またフィジオクラットの政治思想へと接近した時代、それらの時代における啓蒙専制主義的な政治観、そしてそれらを再考し批判を展開していく時代として、小麦論争を通して経済的自由主義の問題点を指摘した時期とその政治学上の帰結、ロシア関連著作における啓蒙専制批判や人々の多様性へと言及した点、さらにはその後の『両インド史』における植民地論における政治論について、彼の政治論が差異や多様性を前提とした政治観を構築するものとしての視点をもっていった点について明らかにしていった。これらの研究については、公刊された単著、及び論文に示されている（〔図書〕③、〔論文〕②として公表、なお〔図書〕①については本研究以前からの継続の成果である）。さらに、本研究は、従来のフランス啓蒙の政治像に一定の修正を迫るものとして、近年の啓蒙研究にも寄与したものとと言える。

③さらに、本研究は、近代ヨーロッパにおける文明と未開、あるいは文明化に関する思想を分析し、図書や論文でも論じたが、他に書評を執筆した（〔その他〕②）。初期近代のイングランドにおける *civility* の概念を扱った最新の著作に関する書評である。他に、同様の視点は、〔図書〕③、〔論文〕③、〔論文〕②にも活かされている。未開に対する文明であり、静的状態としての文明という概念に対して、動的状態を示す文明化の過程を示す文明化 (*civilization*) という新たな語彙の登場の思想的背景や含意などについても検討した。

(2) 想像力、共感能力について

既に、〔図書〕①や〔論文〕②で、多様性や差異を包括した政治社会のあり方について議論してきたが、これは社会的排除と包摂という現代の政治課題に通ずる課題である。特に、格差社会や世代間格差など様々な社会的な利害対立を抱える現代において、功利主義的人間観を前提とした政治経済秩序観は

ある種の行き詰まりも見せており、利他的感情を前提とした政治社会の構想を考察する動向があるが、本研究も、多様性や差異を前提としつつ、共感や想像力など利他的感情と公共空間との関係について政治思想的アプローチから取り組んだ。この問題は、既に〔図書〕③においても、デイドロの植民地論などにおいて展開された点だが、これをルソーなども含めて、さらに以下の二つの観点から議論していった。

①利他的感情と教育

他者への共感能力、想像力、憐憫の情などの利他的感情が、市民社会や公共社会において果たす役割について、特に市民教育や政治教育などの観点から検討した（主に、〔図書〕①）。この問題は、福祉や震災や貧困問題など、異質な人々や遠くの他者への共感能力の育成の問題に繋がり、また政治社会の前提となる公的意識の問題にも繋がるテーマである。特に、現代におけるシティズンシップ教育の議論においてガットマンなどが共感能力を重視しているように、古くて新しいテーマでもある。市民教育、政治教育を政治思想史の中に描く時、人間＝市民を前提として祖国愛を重視する古代ギリシアの系譜に対して、祖国愛にとらわれない人間的教養そのものの育成に関わろうとする古代ローマにおけるフマニタス (*humanitas*) を育てるキケロらの教養観、教育観の伝統がある。後者においては、キケロらが古代ギリシアのパイデア (*paideia*) の訳語として使用したものが、そこにヘレニズム的要素が加わり、国境を越えた人間的教養を求める教育観が生まれる。さらに、近代においては、市民の教育、人間の教育、国家の教育という三つ立場が併存して展開していき、人間の教育という点ではルネサンスにおいてはエラスムスやモンテーニュなどがギリシア・ローマの古典のうち人間教的教養を見だし、自由人にふさわしい教育を説いていく。さらに、ルソーの『エミール』は、他者への共感能力を育てるべく、隣人愛を人類愛へとつなげる市民教育を理想として描くが、他方で『政治経済論』や『ポーランド統治論』では、公教育を祖国愛の教育に限定する。この祖国愛教育は外国人に排他的でありつつも、ルソーは一定限度に限界づけられた社会においてこそ、共同体内における人間の利害や感情は具体的なものになるとして、民主主義の前提として親密な政治空間の必要性を説く。しかし、『エミール』に影響を受けたカントは、教育学の講義において、自己の利益に限定されず、教育計画の構想を世界主義的に打ち立てるべきものとして、他人に対する人間愛、世界公民的心情を育てる心情を教育において重視していく。人類愛と祖国愛のいずれに比重をおき、また

共同体における他者をいかに包摂するかについては、現代においても、国民国家内の先住民や民族的人種的少数派など固有の文化的・集団的アイデンティティを重視する多文化主義や、地球大の課題へ応答するコスモポリタンな市民の育成などみられるが、前者については、集団の同質性を再生産するとの批判もあり、両者についても文化的多様性や道徳的理想は一定の境界内や国家に限定づけられてこそ意義があるものとの批判もある。この分野の概念史としては希少なものと考える。

②共感能力と思想的系譜

さらに、近代政治思想における共感の思想史を中心として、古代から近現代にかけての共感の概念史について検討した。近代においては、モラルセンス学派の共感能力を分析、それとは異なる文脈で共感を論ずるルソーやデイドロラを検討（これについては、既に〔図書〕③、〔論文〕③でも公表）、さらには、現代におけるアマルティア・センらの共感概念の評価や、アレントらによる共感概念の批判など多角的に分析した。これについては、次年度に、共著（『政治概念の歴史的展開 第8巻』）に論文として刊行予定である。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計3件）

①井柳美紀「民主政治の起源」、『Voters』、No.9、2012、22-23、査読無。

②井柳美紀「多様性とつながり—デイドロの『百科全書』以降の政治思想」、『創文』、1、2011、7-9、査読無。

③井柳美紀「18世紀ヨーロッパにおける中心と周縁—ヴォルテール、ルソー、デイドロラの『未開人』への眼差し」、『政治思想研究』、10、2010、31-64、査読無。

〔図書〕（計3件）

①井柳美紀「政治教育」、古賀敬太編『政治概念の歴史的展開』、晃洋社、第5巻、2013、79-104。

②井柳美紀「民主政治の起源」、川出良枝・谷口将紀編『政治学』、東京大学出版会、2012、1-20。

③井柳美紀『デイドロ』 多様性の政治学、創文社、2011、280。

〔その他〕

①井柳美紀「貴族制」「君主制」、大澤真幸・吉見俊哉・鷲見清一編、見田宗介編集顧問『現代社会学事典』、弘文堂、2012、248-249、

329-330。

②井柳美紀、「書評：政治思想史(欧米) 対象 木村俊道『文明の作法—初期近代イングランドにおける政治と社交』」、『年報政治学』、2011、297-299。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

井柳美紀 (IYANAGI MIKI)
静岡大学・人文社会科学部・准教授
研究者番号：50420055

(2) 研究分担者 なし

(3) 連携研究者 なし